救われないかもしれないセカイで僕達は

Daphne(?)

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

春野結衣は、ＶＲＭＭＯＲＰＧのソードアート・オンライン、通称ＳＡＯを

幼馴染の白金燐子達と遊ぶ事になる。

しかし、ゲームマスターの茅場晶彦から告げられたＳＡＯの真実とは……

「こんな世界、救われちゃいないんだ。

だけど、僕達は明日に向かって進む。大切な人を守る為に。」

ＳＡＯの知識はあんまり無いのであしからず。

ダークソウルは多少は分かります。

目次

SAO編

第1話　恐怖と絶望に満ちた世界 ―― 1

第2話　次元斬・絶!!!!! ―― 4

第3話　βテスター ―― 7

第4話　ブル・ディアボロ ―― 12

第5話　竜狩りの騎士と処刑者 ―― 15

第6話　希望は捨てちゃいけない ―― 20

第7話　墓王 ―― 24

第8話　アンジェロ ―― 28

第9話　深淵に堕ちた騎士と深淵の主 ―― 31

ＳＡＯ編

第１話　恐怖と絶望に満ちた世界

西暦２０２２年、世界初のＶＲＭＭＯＲＰＧのソードアート・オンライン
通称ＳＡＯがベータテストを経て発売となった。

発売当日
結衣「予約出来て良かったね！りんちゃん！あこ！」
僕の名前は春野結衣（はるのゆい）。これでも男。
顔は女の子っぽいって言われるけど。
花咲川高校２年生。
燐子「そうだね……ゆーくん……」
この子は白金燐子。僕の幼馴染で、りんちゃんって呼んでる。
同じクラス。
りんちゃんはゆーくんって呼んでる。
あこ「だね！」
この子は宇田川あこ。りんちゃんの友達で、絶賛中二病。
いつでもかっこいいを求めてる。
結衣「この後リサさん達と遊ぶんだっけ？」
あこ「そうだよ！」
この後結衣達は、救われないかもしれない世界で
生き抜く事になるとは知るはずもない。

僕達はログインをして、アインクラッドの始まりの街で

待ち合わせをしていた。
リサ「あ！いたいた！おーい！」
プレイヤー名はＬｉｓａと書かれていた。
あこ「リサ姉ーー！」
結衣「どうも！」
燐子「こんにちは……」
紗夜「こんにちは。」
この人は氷川紗夜。花咲川の風紀委員で、かなり厳しい。
友希那「来たのね。」
この人は湊友希那。歌が上手くて猫好き。
あこ「れっつごー！」
結衣・リサ「「おーーーーーー!!!!!」」
友希那・紗夜「「ふふっ。」」
燐子「（*´ ω、*）」

僕達は最初のフィールドで楽しんでいたのだが……
いきなり最初の街に戻されたのだ。
リサ「え!?何で!?」
結衣「どういう事……？」
あこ「りんりん……」
燐子「あこちゃん……」
友希那「どういう事かしら……？」
紗夜「何故……？」
そんな事を考えていると、赤いフードの物体が出てきた。
それと同時に、自分達の姿が現実世界と同じになっていた。
６人「え!?」
赤いフードの物体が話し出す。
???「プレイヤーの諸君。私は茅場晶彦。
メニューにログアウトボタンが消滅していることを気づいているだろうか。」

結衣「(そういえば……)」
茅場「これは不具合では無く、ソードアート・オンライン本来の仕様である。」
結衣「(仕様……?)」
茅場「諸君らは自発的にログアウトする事は出来ない。
もし外部からの強制終了が試みられた場合、
諸君らの脳はナーヴギアによって破壊される。」
燐子「え……?」
あこ「嘘……」

この後覚えている事は、この世界で死んだら現実でも死ぬという事。
でも僕は、1つ誓った。

この5人だけは何があっても守ると。

このデスゲームが始まってから1ヶ月。
死亡者は1000人を超えた。
僕達6人はまだ生きてます。
僕はあまり休まずにレベリングをしてるので
りんちゃんに心配されています。
アルゴという情報屋によると、始まりの街のはずれにある森に
レベルが上がるごとに攻撃力が上がるから終盤まで使えて、
魔人化という能力も使える闇魔刀ととという日本刀が
刺さっているらしくて、推奨レベルは25だとか。

……明日行ってみようかな。

第2話　次元斬・絶!!!!!

翌日、僕は始まりの街（第1層）のはずれにある森へと向かった。
他の5人は最初のフィールドでレベリングをしている。

敵を倒しながら進んでいくと、
闇魔刀が刺さっている場所に着いたのだが……
結衣「（あれ、俗に言うアイアンゴーレム……？）」
アイアンゴーレムが立っていた。
結衣「（行くしかないよね……）」
アイアンゴーレムの前に行くと、何も起きなかった。
結衣「（まさか引っこ抜いたらのやつ……？）」
結衣「抜けない……！」
全く抜けない。レベルは足りてるはず。
結衣「ぐぬぬぬぬぬ……！」
結衣「お、抜けてきた！」
後少しで闇魔刀が抜けそうだ。
結衣「抜けた！」
と、思ったのもつかの間、アイアンゴーレムが起動した。
結衣「やっぱり！」
僕はすぐに手持ちを闇魔刀に変える。
アイアンゴーレムは衝撃波を放ってきたが……
結衣「ほいっ！」
闇魔刀によって真っ二つになった。
結衣「すごい……」
結衣「よし……！」
僕は幻影剣という遠距離武器を自分を囲むように展開する。
結衣「いくぞ……」
僕は魔人化と分身をして、高速移動をしながら次元斬・絶を発動する。
結衣「……」闇魔刀を鞘に差す

アイアンゴーレムが切り刻まれ、粒子となって消える。
結衣「強っ……」
僕はアルゴに感謝のメッセージを送りつつ、足早に森を出た。

森を出ると、りんちゃん達から「先に街に戻ってるね」というメッセージが来ていた。
結衣「「分かった。」っと……」
しばらく歩くと、黒い服を着た少年から話しかけられる。
???「君、それって……」
結衣「これ？閻魔刀だよ。」
???「俺でもまだレベリング出来てないのに……もしかしてベータテスターか？」
ベータテスターか……
何かベータテストやってたのは知ってたけど……
結衣「ううん。アルゴって情報屋から教えてもらった。
あとレベリングが必須のゲームは散々やってきたから忍耐力はあるんだ。」
???「ほう……」
そういえば名前……
結衣「あ、名前は？」
???「俺はキリト。君は？」
結衣「僕はユイ。これでも男。」
キリト「よろしく、ユイ。」
結衣「よろしくね、キリト。」
キリト「これから帰る所か？」
結衣「そうだよ。キリトも？」
キリト「あぁ。」
結衣「一緒に帰ろっか！」
キリト「そうだな。」
僕達は街まで一緒に帰った。

街にて、待ち合わせ場所には既に5人が居た。
結衣「お待たせー！」
燐子「あ、ゆーくん……」
あこ「ゆー兄！」
リサ「遅いぞー？」
紗夜「そうですよ。」
友希那「その人は？」
友希那さんの質問にキリトが答える。
キリト「俺はキリト。よろしく。」
リサ「よろしくー☆」
キリト「よろしく。そういえば明日、第1層のボスの攻略が行われるんだ。」
結衣「へー。」
キリト「ユイ達はどうする？」
キリトの質問に僕が最初に答える。
結衣「僕は行くよ。やらないといつまでも現実に帰れないし。
キリト「だな。他は？」
5人「うーん……」
リサ「早く帰りたいし……」
あこ「だよね……」
紗夜「行くしか無いです！」
4人「うん！」
キリト「決まりみたいだな。」
第1層だし、閻魔刀だったら……
結衣「ボス名は？」
キリト「イルファング・ザ・コボルドロード」
結衣「ほう……」
リサ「ボス攻略頑張るぞー！」
7人「おー！」

第3話　βテスター

翌日、ボス攻略の日となった。
ボス部屋の前で、リーダーによる説明が行われていた。
結衣「キリト、隣の人は？」
キリト「俺とパーティのアスナ。」
アスナ「よろしく。」
結衣「よろしくね。」
ディアベル「よし！行くぞ！」
おー！と掛け声があがる。

ボス部屋に入ると、ボスが奥に手下と共に立っていた。
結衣「（あれがボス……）」
ボスはこちらに気づいて向かってくる。
ディアベル「行くぞー！」
こちらも全力疾走する。
キバオウだったかな？そいつとかが手下の処理をしている。
結衣「リサさんはヒール、友希那さんはバフ付与で紗夜さんはガード、
りんちゃんとあこは攻撃魔法をお願い！」
5人「うん（えぇ）！」
結衣「行くよキリト！アスナ！」
2人「あぁ（うん）！」
結衣「僕のソードスキルのチャージの時間を稼いで欲しい！」
キリト「任せろ！」
キリトが「バーチカル」を放ってすぐに
キリト「アスナ！スイッチ！」
アスナ「分かった！」
アスナが「リニアー」を放つ。

僕は次元斬・絶のチャージをする。
アスナ「あれは特殊能力の魔人化……！」
僕はキリトに避けてと言ってボスに斬り掛かる。
攻略メンバーａ「分身……？」
攻略メンバーｂ「何だ……？」
ボスに多段ヒットし、ＨＰが５本あるうちの２本半まで減る。
アスナ「強い……」
キリト「何だあれ……」

しばらくして、ボスのＨＰバーが１本になった時、
ボスが斧を捨て、刀に持ち替えて動きを速くする。
ボス「グォォ！」
ボスが刀を振り下ろし、竜巻を起こす。
キリト「全員下がれ！」
しかし既に遅く、全員竜巻攻撃を喰らって吹き飛ばされる。
結衣「くっ！」
キリト「くそっ！」
ディアベル「うわぁぁぁぁ!!」
ディアベルがモロに喰らってしまった。
ボスが再度攻撃をディアベルに喰らわせる。
キバオウ「ディアベルはん！」
ディアベルがポリゴンとなり散った。
結衣「くっ……！」
もう一度次元斬・絶を使おうと思ったが、ＭＰが足りなかった。
僕は手持ちを大剣の「フォースエッジ」に変更する。
ボスが僕に向かってきて、攻撃しようとする。
キリト「ユイ！」
僕はフォースエッジで攻撃をギリギリ受け止める。
結衣「はぁっ！」
僕はボスに連撃を入れると、ボスが怯む。
結衣「キリト！アスナ！」

キリト「分かった！」
アスナ「えぇ！」
キリトとアスナがソードスキルを発動してボスに突っ込む。
キリト「終わりだぁぁぁ！」
ボスが消滅する。

攻略メンバー「やったーーー!!!」
僕達の勝ちとなり、歓声があがる。
僕は魔人化を解除する。
ウィンドウにはアイテムが表示されている。
結衣「ラストアタックボーナスはコート・オブ・ミッドナイト……」
キリト「ほう……」
結衣「あげるよ。もう青のコートあるし。」
正直黒より青の方が好きだし。
キリト「良いのか？」
結衣「うん。」
そんな話をしていると、キバオウが叫ぶ。
キバオウ「なんで……なんでや！なんでディアベルはんを見殺しにしたんや！」
ホール内が静かになる。キバオウはキリトに向かって言う。
キバオウ「あんたはボスの使うスキルを知ってたんやろ!?なんで伝えなかったんや!!」
キリトは顔色を変えず聞いている。
キバオウ「伝えてればディアベルはんは死ななかったやろ！」
その声に反応し、数人のプレイヤーがそうだそうだと賛同する。その中の一人が、指をキリトに指して言う。
プレイヤーａ「オレ……オレ知ってる！こいつ、元βテスターだ！自分だけ情報を知ってて、それを隠してたんだ！」
部屋の中がざわめき始める。
プレイヤーｂ「それなら……その横にいるそいつも元βテスター

だって事だろ？」
なんか勝ち誇ったような顔をしている。ま、僕は違うんだけどね。
キリトが話し出す。
キリト「……元βテスターだ？俺をあんな素人達と一緒にするな。俺はβテストで誰も上ったことのない階層まで上ったんだ。
お前らが知らない情報だって沢山持ってるぞ。」
プレイヤーa「な……なんだよそれ……もうチートだ！チーターだ！」
周りからチーターだ、いやβのチーターだからビーターだっていうのが聞こえる。なんか僕もそうなっているらしい。
キリト「ビーター……いい響きだな。そうだ。俺はビーターだ。
元テスターごときと一緒にしないでくれ。」
キリトは怪しい笑みを浮かべ、コート・オブ・ミッドナイトを装備する。
キリト「二階層の転移門は俺が有効化しといてやる。後、プレイヤースキルを上げてと強い武器を手に入れとかないと３０階層のボスの「オーンスタイン」と「スモウ」に呆気なく殺されるぞ。ま、お前らが辿り着けるかな。」
そう言ってキリトは立ち去り、アスナがキリトを追いかけていった。

プレイヤーb「後はあんただけ……」
結衣「お前らみたいな虫けらとは一緒にしないでくれる？」
２、３人のプレイヤーが顔をしかめる。
結衣「僕はお前らとは違って使用武器が３種類あるし、
何よりこの「闇魔刀」があるからねぇ。」
プレイヤーb「何だと……!?」
結衣「ははっ。」
僕が笑うとキリトを知っていたプレイヤーがまた思い出したよう

に言う。

プレイヤーａ「こいつ、ＮＦＯのブル・ディアボロだ！」

第４話　ブル・ディアボロ

プレイヤーａ「こいつ、ブル・ディアボロだ！」
プレイヤーｂ「破滅級のワイバーンを１人で倒したあの……？」
プレイヤーｃ「嘘だろ……？」
結衣「ご名答。僕がブル・ディアボロだよ。」
プレイヤーｄ「Ｒｏｓｅｌｉａと組んでたのか……？」
結衣「ん？いつ組んでるなんて言った？」
一緒に行動してはいたけどパーティは組んでないし。
プレイヤーｄ「じゃあ、そいつら貰っても良いんだな？」
うわぁ……
結衣「下心丸出しだね。」
プレイヤーｄ「んなっ!?」
その反応はやっぱりか……
結衣「お前らについて行くかは、Ｒｏｓｅｌｉａの皆が決める事だよ？」
結衣「皆はどうするの？」
友希那さん達を見ると、答えは決まっている様だ。
友希那「私達はユイについて行くわ。」
リサ「だね！」
紗夜「そうですね。」
あこ「うん！」
燐子「ですね……」
結衣「これが彼女らの答えだけど。反論は聞かないよ？」
そう言うとプレイヤーａが話し出す。
プレイヤーｄ「俺らと半減決着モードで戦え。」
結衣「良いけど。」
はぁ……どうせ僕に勝てないんだしやらなくて良くない……？
結衣「あ、やってる間に攫っていったら容赦しないからね？」
何か舌打ちが聞こえたような……

プレイヤーｄ「よし、行くぞ。」
デュエル開始の合図が鳴る。
プレイヤーｄ「うおおおお!!!」
４人が一斉に斬りかかる。
結衣「……」
魔人化を使い、右手の武器をフォースエッジから闇魔刀に変える。
プレイヤーａ「消えた!?」
そして鞘から闇魔刀を抜き、次元斬・絶を発動する。
４人「ぐわぁぁぁぁ!!!」
すぐに体力が半分になる。
結果、僕の勝利となった。
プレイヤーｂ「強すぎる……」
結衣「(雑魚が……)」
あこ「ゆー兄!りんりんが!」
結衣「は……?」
何か連れ去られてるんだけど……
幻影剣を使いりんちゃんの元へ向かう。
結衣「何してるのかな……?」
プレイヤーｅ「ひっ……!」
プレイヤーｅを蹴り飛ばし、りんちゃんを抱き寄せる。
結衣「りんちゃん大丈夫?」
燐子「うん……」
プレイヤーｅ「この……!?」
僕はプレイヤーｅに闇魔刀を向ける。
結衣「……死にたいの?」
プレイヤーｅ「すみませんでした!!!」
結衣「はぁ……」
結衣「行こう、皆。」
４人「うん(ええ)!」
僕達は２層に上がって行った。

年が明け、気付けば２０２３年８月になっていた。
もう夏かぁ……
ポピパとか彩達は元気にしてるかなぁ。
６人全員まだ生きてます。
今は３０階層で攻略が止まっているらしい。
あれ？「オーンスタイン」と「スモウ」じゃなかった？
そんなに強いの……？

第５話　竜狩りの騎士と処刑者

２０２３年８月中旬、現在３０階層のアノール・ロンドの攻略が行われている。
最近はりんちゃん達と２２階層の家でのんびりしてたから、久しぶりに前線行ってみようかな？

今は深夜を過ぎた頃。僕とりんちゃん以外は寝ている。
結衣「ねぇりんちゃん。」
僕とりんちゃんは肩を寄せ合っている。
燐子「何かな……？」
結衣「僕、そろそろ前線に戻ろうかなって考えてるんだ。」
燐子「駄目……」
りんちゃんが僕を強く抱きしめる。
結衣「りんちゃん……？」
燐子「そんなのやだよ……！」
りんちゃんが泣いている。
燐子「前線は何が起きるか分からないし……！」
結衣「……りんちゃん、顔上げて。」
燐子「何……？」
結衣「絶対帰ってくるから。」
燐子「ホント……？」
結衣「ホント。嘘じゃない。」
結衣「だから、泣かないで。」
りんちゃんの涙を指で拭ってあげる。
燐子「分かった……」
燐子「んっ……」
りんちゃんが口づけをする。
結衣「んっ……」
とても甘い。けど、切ない味がした。

夜明け前に僕は支度をして家を出た。
３０階層に転移して外に出ると、綺麗な都市だった。
結衣「これがアノール・ロンド……」
キリト「ユイ……？」
後ろを振り向くと、黒のコートに身を包んだキリトが居た。
結衣「キリトか。これからここの攻略をしようと思っててね。」
キリト「１人でか？」
結衣「え？うん。」
キリトが驚いている。
キリト「ここは１人でじゃ到底無理だ。
ボス部屋は開いているが、死者がそこだけで３００人出てる。」
３００……!?
結衣「え……!?」
キリト「俺と攻略しよう。」
１人では死ぬな……
結衣「分かった。」
こうして、僕とキリトのアノール・ロンド攻略が始まった。

ボス部屋の近くにて、目の前にあったドアを開けると……
キリト「その部屋はデーモンが居る！」
デーモンが居た。
結衣「危なっ！」
僕はすぐにドアを閉める。
結衣「ふー……」
キリト「後少しだぞ。」
結衣「ん。」

ボス部屋の前にて、後ろに敵が居たのですぐに部屋に入った。
結衣「あれがオーンスタインとスモウ……」
キリト「オーンスタインが来るぞ！」
結衣「うわっ！」
オーンスタインが突き攻撃をして来て、ギリギリで避ける。
僕とキリトが背中を合わせる。
結衣「どっちから殺る？」
キリト「ここは後に倒す方が巨大化する。
巨大化で倒しやすいのはスモウ。」
じゃあ……
結衣「答えは1つ……」
結衣・キリト「「オーンスタインが先!!!!!」」
オーンスタインに攻撃を仕掛ける。
キリトがヴォーパル・ストライクを発動する。
キリト「スイッチ！」
僕が刀のソードスキル「浮舟」を発動する。
オーンスタインは連続でソードスキルを受けたため怯む。
結衣「キリト！」
キリト「ふっ！」
スモウの攻撃をキリトが避ける。

キリト「これで終わりだ！」
キリトのバーチカル・アークで
オーンスタインにトドメを刺す。
結衣「次はスモウ……」
スモウがオーンスタインをハンマーで叩き潰して、
エネルギーを吸収して巨大化する。
キリト「行くぞ！」
結衣「あぁ！」

スモウへと向かい剣撃を刻む。
結衣「スイッチ！」
キリト「うおおおお!!!」
キリトがホリゾンタル・スクエアを発動する。
キリト「ヒップドロップだ！」
スモウがヒップドロップをしてくる。
結衣「隙だらけだ！」
フォースエッジに変えて兜割りをすると、スモウが怯む。
キリト「はあっ！」
キリト「何!?」
キリトの攻撃がハンマーで受け止められる。
キリト「ぐあっ！」
結衣「ぐっ！」
吹っ飛んで来たキリトにぶつかる。

結衣「（あと1本半……）」
結衣「キリト、ＨＰポーションは何個ある？」
僕はキリトに質問する。
キリト「あと１０個だ。」
結衣「……内なる大力を使う。」
キリト「それってまさか……」
内なる大力。
それはＨＰが減っていく代わりに攻撃力が大幅に上昇する呪術。
結衣「行くぞ！」
魔人化をして、内なる大力を使いスモウに突っ込む。
キリト「死んだら元も子も無いんだぞ！」
結衣「僕を信じてくれ！」
僕は高速移動をして、闇魔刀でスモウにダメージを与える。
キリト「やるしか無い！」
キリトが加勢する。
結衣「これで終わりだぁぁぁぁぁ!!!!!」

最後の剣撃を放ち、スモウが消える。
結衣「ポーション！」
キリト「あぁ！」
キリトからすぐにポーションを渡されて飲む。
結衣「危なかった……」
キリト「ホントに無茶を……」
結衣「ごめん。」
結衣「ていうかめっちゃレベル上がる」
キリト「そういえば」
僕がＬｖ４５から６０、キリトがＬｖ５０から６５。

結衣「あれが転移装置か」
キリト「みたいだな」
僕達は転移装置で２２階層の居住区に戻った。

第６話　希望は捨てちゃいけない

アノール・ロンド攻略の２ヶ月前。
暇つぶし程度に２７階層の迷宮区に居た時の話。
結衣「（雑魚しか居ない……）」
そんな事を思っていると後ろから話しかけられた。
キリト「ユイ、また会ったな」
結衣「キリトか。その人達は？」
サチ「私達、（月夜の黒猫団）って言うギルドを５人でやってるんだ。リーダーは今別の階層でギルドホームの手続きしてくれてる。」
結衣「そうなんだ。よろしく、サチさん。」
サチ「サチで良いよ。」
結衣「分かった。」

しばらく歩いていると、カチッという音がした。
サチ「……？」
結衣「（まさか！）」
敵が出現する。
キリト「トラップか！」
結衣「転移結晶は！」
キリト「使えない！」
結衣「くそっ！」
戦うしかないようだ。
僕は次元斬・絶の構えをして、チャージをする。
結衣「少し持ちこたえてくれ！」
キリト「分かった！」
サチ「うん！」

結衣「（母さんが言ってたあの言葉……）」

結衣、守りたいものを守れる人間になりなさい。
結衣「今だ！」
僕は次元斬・絶を発動する。
サチ「すごい……」
攻撃が終わり、僕が闇魔刀を鞘に差した瞬間、全部の敵が消滅する。
結衣「ふぅ。」
サチ達から拍手された。
サチ「ありがとう！」
結衣「これでもＮＦＯでワイバーンを……おっと。」
まさかブル・ディアボロ？と言われたので
結衣「バレちゃったか。」
と言ったら
サチ「本物だ……！」
結衣「う、うん」
サチが嬉しそうな顔をしていた。

この後サチ達は、ギルドホームでゲームが終わるまでそこに居るらしい。
元気にしてて欲しいなぁ。

時は現在に戻り、１０月を過ぎた頃。もう秋です。
６人まだ大丈夫です。
アルゴの情報によると、４０階層から１０階層おきに墓王ニト、混沌の苗床、白竜シース、四人の公王というかなり強いボスが出るらしい。
後、裏ボスも居るらしい。
僕とキリトは４０階層の迷宮区を攻略していた。

キリト「そういえば血盟騎士団って知ってるか？」
結衣「あー、大規模の強いギルドでしょ？」
キリト「そうそう。それが……」
アスナ「あら、キリト君とユイ君じゃない。」
噂をすれば……
アスナ「どんな噂？」
結衣「心読まないでくださいアスナさん」
何だろう。以前の様な優しさが……
キリト「そっちもここの攻略か？」
アスナ「そう。」
結衣「ふーん。」
え、何かぞろぞろやって来たし。
キリト「アスナは血盟騎士団の副団長なんだ。」
結衣「へぇ。」
こいつ副団長の知り合いなのにその事知らないのか？
という声が聞こえたが無視しといた。
アスナ「私達はこれで。」
結衣「……クリアする事に必死でリラックス出来てない。
そんな調子だとクリア前に死ぬよ？」
アスナ「……何？」
周りがざわめき始める。
キリト「ちょっとユイ……」
キリトが心配そうな顔をしている。
結衣「肩の力が抜けてない。
それだとヘマをして自分が死ぬか仲間が死ぬかの２択だ。」
団員ａ「貴様……」
アスナ「下がってなさい。」
団員ａ「しかし……」
アスナ「命令に従いなさい。」
団員ａ「はい……」
結衣「ボス部屋に入る前に深呼吸をすると良いかもね。」

アスナ「分かった。」
アスナ率いるパーティは先にボス部屋に向かって行った。
結衣「僕達も行こう。」
キリト「あぁ。」

ボス部屋の前にて、アスナのボス攻略の説明が行われていた。
アスナ「このボスは神聖武器が必要となるので、準備してください。」
アスナ「それでは行きます！」

第7話　墓王

アスナ「それでは行きます！」
アスナが扉を開ける。
中に入ると、暗かった。
結衣「暗い……」
そう思っていると、叫び声が聞こえてくる。
結衣「危なっ！」
いきなり地面から剣が出てきたのだ。
アスナ「スケルトン6体！」
アスナの声を聞いた血盟騎士団のメンバーが、スケルトンを処理する。
僕とキリトとアスナの3人でニトの方へ向かう。
結衣「キリト！スイッチ！」
キリト「あぁ！」
キリトがヴォーパル・ストライクを放つ。
キリト「アスナ！スイッチ！」
アスナ「はっ！」
アスナがカドラプルペインを放つ。
しかしニトは怯まなかった。
アスナ「波動が来る！」
ニトが波動を使う。
他のプレイヤーは吹き飛ばされ、3人は大きく後ずさりする。
結衣「くっ！」
僕は魔人化を発動し、幻影剣でニトの近くへワープする。
ニトにジャンプ斬りを仕掛けたが、剣で弾き返される。
壁を蹴って宙に浮いている間に装備を、
最近手に入れたベオウルフという籠手と具足の武器に変えて飛び蹴りを
する。
結衣「おらっ！」

ニトが怯み、隙が出来る。
結衣「キリト！アスナ！」
キリト「あぁ！」
キリトがバーチカル・スクエアを放つ。
キリト「スイッチ！」
アスナ「うん！」
アスナがフラッシング・ペネトレイターを放つ。
ニトのＨＰバーが６本から４本半になる。
僕は次元斬・絶のチャージをする。

結衣「はぁっ！」
次元斬・絶を放つ。
ニトのＨＰバーが２本になる。
キリト「終わりだぁぁぁぁ!!」
キリトがノヴァ・アセンションを放つ。
ニトはポリゴンとなって消えた。
ＣＬＥＡＲの文字が出現し、大歓声があがる。

アスナと別れて４１階層の主街区に転移し、ドロップ武器の話をする。
キリト「ラストアタックボーナスは……墓王の剣か……」
結衣「大曲剣で属性は猛毒……」
正直要らない。
キリト「俺も要らないんだよなぁ……」
しれっと心読まれたような……
???「なるほど……」
え？この赤髪誰？
キリト「あ、クライン」
クライン「おっす、キリト。」
結衣「えっと……」
クライン「俺はクライン。キリトの仲間だ。……って閻魔刀じゃん

!!」
結衣「う、うん」
クラインが目を輝かせている。
クライン「すげぇ……」
???「そんな代物をどこで？」
結衣「始まりの街のはずれの森にあるってアルゴが。」
???「アルゴか……高かっただろ？」
武器の強化であんまりコルが無かったからな……
結衣「結構高かった……あ、名前は？」
???「俺はエギル。よろしく。」
結衣「よろしく、エギル。」
結衣「そういえばフォースエッジとこのアミュレットさ、付けられるみたいなんだよね。でも付けるには厚さが無くてさ。」
キリト「それ、アルゴが前に話してた……」
エギル「多分……」

キリトの回想
アルゴ「そういえばユー坊の持ってるフォースエッジとアミュレットの事だけど、もう１つアミュレットがあるらしいんダ。」
キリト「ほう……」
アルゴ「そのアミュレットは４１階層のダンジョンの隠しボスから１つだけドロップするみたいなんダ。」
アルゴ「この情報は無料で良いからユー坊に伝えておくんだゾ。」
エギル「良いのか？」
アルゴ「おねーさんが特別にまけてあげるヨ。」
キリト「ありがとうアルゴ。」

キリト「ってアルゴが言ってた。」
結衣「ありがたい。」
エギル「あと剣もドロップするって言ってたよな？」
クライン「言ってたな。」

結衣「どうする？」
クライン「俺は基本的に刀一筋だし……」
エギル「俺も斧だからな……」
結衣「剣はキリトになるな。」
キリト「それでアミュレットがユイと。」
結衣「だね。」

明日、２人でダンジョンの隠しボスを探す事が決まった。

第８話　アンジェロ

４１階層のダンジョンにて、僕とキリトは隠しボスの部屋を探していた。
キリト「……ここっぽくない？」
結衣「思った……」
キリト「入るか……」
中に入ると、鎧を着た騎士が居た。
結衣「ごつい……」
キリト「だな……」
ボス名はＡｎｇｅｌｏと書かれていた。
結衣「アンジェロか。天使の割には……」
近づくとアンジェロが動き出す。
キリト「来るぞ！」
アンジェロが斬りかかってくる。
結衣「くっ！」
閻魔刀で攻撃を受け流す。
結衣「キリト！」
キリト「うおぉぉぉ！」
キリトがヴォーパル・ストライクを放つ。
アンジェロが怯む。
結衣「はっ！」
閻魔刀とフォースエッジの連撃を入れる。

アンジェロのＨＰバーが４本から２本になり、
アンジェロの様子が変化し、幻影剣の雨を降らす。
結衣「こいつも幻影剣を！」
僕達は走って避ける。
アンジェロの後ろに回り込み、
カスケードとノヴァ・アセンションを放つ。
アンジェロのＨＰバーが後少しの所で、閻魔刀に変える。

結衣「キリト！アンジェロの気を引いてくれ！」
キリト「分かった！」
アンジェロのヘイトをキリトに向かせている間に、
闇魔刀のソードスキルのショウダウンのチャージをする。
結衣「ショウ……ダウン！」
僕の背中から闇魔刀を持った魔人の幻影が出てきて、
僕は闇魔刀とフォースエッジを変えつつ、
幻影は闇魔刀で連続攻撃を与える。
攻撃終了と同時にアンジェロが消滅する。

キリト「よし！」
結衣「終わった……ん？」
キリト「どうした？」
結衣「何かアミュレットが光ってて……」
僕の持っているアミュレットとアンジェロを倒した時に落ちた
アミュレットが光っている。
結衣「何か勝手にフォースエッジが出てきた!?」
結衣・キリト「うわっ！」
２つのアミュレットとフォースエッジが光り輝く。

結衣「これは……？」
フォースエッジは禍々しい雰囲気の剣へ変わっていた。
結衣「魔剣スパーダ……」
それは魔剣スパーダと表示されていた。
結衣「とても強い力を感じる……」
スパーダを天に掲げると、雷が落ちてきた。
結衣「何だ!?」
キリト「魔人化……？いや、それの強化……？」
結衣「説明には「真魔人化を可能にする」って書いてある……」
キリト「なるほど……って！ステータスが魔人化の比じゃない！」

結衣「ホントだ！」
魔人化状態の３倍だ。
結衣「やば……」
結衣「あと、剣の他に槍と鎌に変化するんだって。」
キリト「まじか……」

キリトと別れ、このダンジョンの探索をしていると
結衣「この魔術用の杖強い……」
それに加えて魔術を２つ回収し、２２階層の家へ戻った。

第9話　深淵に堕ちた騎士と深淵の主

２２階層へ転移し、家に戻るとりんちゃん以外が寝ていた。
燐子「ゆーくん！」
結衣「ただいま、りんちゃん！」
燐子「おかえり……！」
燐子「私もレベリングしたんだ……」
結衣「ホントだ、めっちゃ上がってる……」
燐子「でもゆーくんには敵いそうにも無いです……」
燐子「ゆーくん……私も戦いたい……！」
結衣「うーん……」
この先はとても危険。人並みじゃ到底無理だ。
結衣「噂だけど、３８階層に隠しボスが２体居て、
２体目のドロップアイテムを交換した後に手に入る魔術が
とても強いらしいんだ。」
燐子「なるほど……」
結衣「それを取ってくるから、少し待ってて。
燐子「分かった……」
結衣「あと、ダンジョンにあった魔術。」
燐子「ありがとう……」

３８階層に転移し、ダンジョンに潜った
メイン武器はスパーダ、サブで闇魔刀にしている。
結衣「ここが1体目……」
部屋の扉を開けると、モンスターを刺している騎士が居た。
結衣「左手が折れてるのか……？」
深淵歩きアルトリウスと表示されている敵は、
こちらに気づいて雄叫びをあげ、ジャンプして斬りかかってくる。
結衣「ほっ！」
僕はそれを軽々と避ける。

そこから剣と剣のぶつかり合いが始まり、部屋中に重い音が響く。
結衣「だぁぁぁ!!」
僕がアルトリウスに斬りかかると、それを受け止め、
鍔迫り合いが起きる。
結衣「くっ……!」
スパーダを鎌に変形させ、
鍔迫り合いを押しきってダメージを与えると、
アルトリウスが1度下がってオーラを自分の元に集めている。
結衣「自分を強化しているのか……」
結衣「こっちだって!」
僕も真魔人化を使用して、スパーダを剣に変形させて
アルトリウスに突っ込む。
……そこからは真魔人状態の僕の一方的な蹂躙であった。
幻影剣と真魔人で発動される魔力を放出して現れる剣の攻撃で
アルトリウスの体力がみるみる減っていく。
結衣「終わりだっ!」
最後の攻撃を与え、アルトリウスが消滅する。
結衣「2体目はどこかな……」
部屋を出て探し回っていると、怪しい部屋があった。
結衣「ここだな……」
中に入ると、突然何かに引っ張られる。
結衣「わっ!」

結衣「いてて……」
そこには異形の怪物が居た。
深淵の主マヌスと表示されている。
結衣「最初から本気出した方が良いみたいだな……」
すぐに真魔人化を使い、マヌスの攻撃を避ける。
結衣「(あっ、これゴリ押しで行ける)」
攻撃を与えて行くうちにゴリ押しが出来る事が分かった。

マヌスの体力が半分になると、マヌスが魔術を使ってきた。
結衣「危なっ！」
魔術の雨をギリギリで避けていく。
結衣「ショウダウン！」
闇魔刀に変え、ショウダウンを放つ。
マヌスがポリゴンとなり消滅する。
結衣「アイテム回収……っと」
ドロップしたアイテムを回収して、家へと向かった。